

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：34419

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 年 ～ 2012 年

課題番号：22653049

研究課題名（和文） 超高齢化社会に向けた日本人のライフパターン分析

研究課題名（英文） Research on Japanese Life Patterns toward Super-graying Society

研究代表者

青野 京 (AONO MIYAKO)

近畿大学・経営学部・准教授

研究者番号：20273568

研究成果の概要（和文）：ライフパターン研究とは、質問紙調査による大規模な量的データを用いて、個人の各ライフステージにおける生活のあり方や志向性などの経時的な変遷を、パターン化しようとするものである。ライフパターン・モデルを構築するため、予備調査、および第一次、第二次本調査を実施し、分析を行った。その結果、自由時間における活動パターンによってワーク・ライフ・バランスの満足度が影響を受けること、仕事と家庭生活のバランスの満足度や幸福感の高い生活パターンの基本類型などが明らかになった

研究成果の概要（英文）：Research on life patterns is quantitative research by a questionnaire method to pattern changes in a life style and orientation on individual life stages in chronological order. Preliminary survey, primary survey and secondary survey were conducted and analyzed to construct a model of life patterns. The findings indicate that off-time activity patterns have an effect on a level of satisfaction with work-life balance. The basic patterns of life styles with a high level of satisfaction with work-life balance and happiness were also identified.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	0	900,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	480,000	2,980,000

研究分野：商学

科研費の分科・細目：経営学・商学

キーワード：ライフパターン、ワーク・ライフ・バランス、自由時間、余暇、第三領域

1. 研究開始当初の背景

現在の日本は超高齢化社会を迎えており、シルバー世代は今後、購買や労働力を支える層として主要なターゲットとなることが予想される。そのため現役時代からの彼らの志向性や行動パターンを把握し、どのような活動から生活充実度を得ているのかなどを総合的に検討する必要がある。このような観点から、組織労働者対象に「職場・仕事」「家

庭・家族」「第三領域（余暇や趣味、地域・社会など）」の3つの領域の過ごし方に関する横断的な調査を実施し、縦断的な調査に向けての調査票の設計を行うことを目指した。これらは日本人のライフパターンの変遷をとらえる基礎研究として位置づけられる。

2. 研究の目的

ライフパターン研とは、生涯発達心理学的な

知見を基礎として、人の人生を量的調査データを用いた分析によってパタン化しようとする試みである。社会学におけるライフコース研究では回顧的なライフヒストリーデータが用いられることが多い。しかし、組織労働者を対象にパネルを用いて定点観測的に量的な縦断的調査を行うことが可能であれば、各時点での個人のライフステージにおける生活、志向性、価値観などの変遷を統計的に記述することが可能である。量的なデータを用いての変化のパタンを抽出する統計的手法はまだ確立されていないが、データ収集の問題と統計的手法の確立を並行して試みることで、日本の一般的な組織労働者が歩むいくつかの典型的なライフパタンを抽出することを目的としている。

本研究では、研究会を組織し、組織労働者対象に調査を行い、縦断的なライフパタン研究に使用可能な調査項目と調査票の作成を試みた。また、統計的なライフパタンの抽出に関する検討とともに、暦年齢とは異なる視点でライフパタンの縦軸を構成する心理尺度の開発も並行して行った。組織労働者の調査データから、家庭、仕事、第三領域（余暇領域）での活動パタンを検討することで、超高齢化社会におけるシルバー世代の労働力活用や引退後の生活の充実に向けての政策に有用な知見を得ることも目的としている。

3. 研究の方法

2010年度は、ライフパタン・モデルを構築するため基礎段階として、組織に働く人々と、その家族を対象に、各ライフステージでの仕事・家庭・自由時間などに関する生活様式、志向性などを検討するための予備調査票の設計を行った。社団法人国際経済労働研究所と連携して複数の企業・労働組合などからの協力を得て、研究者を交えたライフパタン研究会を組織し、設問設計や調査内容に関する議論・検討やヒアリングを行った。

2011年度においては、主に組織労働者とその家族を対象に各ライフステージでの仕事、家庭、自由時間などに関する生活様式や志向性などを検討するための予備調査票の設計を行った。設計に際しては日本心理学会にてワークショップを行い、産業・労働・研究者の協働による調査研究の必要性と可能性を議論した（2011年10月）。2011年12月～翌1月の予備調査の回収を経て、約1000件のサンプルを分析し、第1次本調査の設計を行った。

2012年度には、ライフパタンを構成する ① 仕事・職業生活領域、② 家族・家庭生活域、③ 余暇・自由時間領域（第三領域）の3つの

領域を盛り込んだ第1次本調査（約3500サンプル）の配布・回収を行った。予備調査、第1次本調査の分析・検討をふまえて、第2次本調査を2013年3月に行った。この間、ライフパタンの縦軸を構成する心理尺度である「生き方尺度」などの開発も並行して行った。パネルデータを用いた縦断的調査とライフパタン抽出のための統計的手法については複数の心理統計の専門家と検討会を継続しており、現在も検討中である。

4. 研究成果

<ライフパタンのタイプ>

研究期間においては日本人の組織労働者対象に質問紙調査を数度行い、彼らのライフパタンを構成する 仕事・職業生活領域、家族・家庭生活域、余暇・自由時間領域（第三領域）の3つの領域に関する生活自体やさまざまな要因の検討をおこなった。

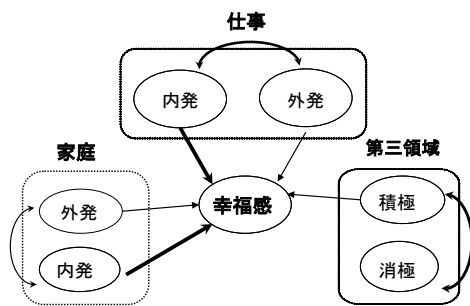
第2次本調査では、ライフパタンを構成する「職場・仕事」「家庭・家族」「第三領域（余暇や趣味、地域・社会など）」の3つの領域について、各領域を「生きがい・楽しみ」にしている程度と、実際に時間を割いている程度を問い、その配分によりタイプ分けを行った。これによって「本当は家庭生活を充実させたいのに、仕事が忙しくて時間が取れない」などのケースを抽出することが可能であり、複雑な個人の生活領域をより正確にとらえることが可能である。

結果として、趣味や余暇および地域・社会が生きがいや楽しみの対象でありながら、実際には仕事に多く時間を配分している「第三理想型」と、仕事生きがい・楽しみの対象であり時間もそれに多く配分している「仕事現実型」、家庭が生きがいの対象であるにもかかわらず現実には仕事に多くの時間を割いている「家庭理想型」がそれぞれ約3割となり、日本の組織労働者の生活配分は、理想としては「家庭」「趣味や余暇」「仕事」とそれぞれ分かれるものの、実際の生活においては「仕事」に時間とエネルギーを費やさざるを得ない現状が示された。ライフステージでみると、男女ともに未婚の時は「第三理想型」の割合が高いが、結婚して子供を持つようになると「家庭理想型」が多くなり、特に女性はこの傾向が強いことが示された。ワーク・ライフ・バランスという観点からは、仕事と家庭生活のバランスの満足度が高いのは「家庭理想型」であり、このタイプは生活全般の満足度も高いことが明らかになった。

<家庭生活と家族・家庭関与>

家庭領域については、家族との関係や家庭

関与のあり方が内発的であり、相手のニーズや状況に対応的なコミュニケーションを築くことができていることが、生活の諸領域における満足度や生きがい感・幸福感と関連していることが示された。このような家族のニーズに敏感で対応的な態度を持ち行動している割合は男性に比して女性の方が高かった。男性では既婚者において、この得点が高いほど職場の人間関係が良好で、仕事も自律的にできているという評価が高い傾向にあった。このことから、家庭に対する関与の高さは仕事への動機づけを低めるものではなく、むしろ、そのことが仕事にも意欲的に取り組めるような相乗効果をつくりだす可能性が高いことが示された。家族や家庭への内発的な関与意識は下図に示されるように仕事領域とともに、生活のいろいろな領域における満足度や生きがい・幸福感と関連しており、ワーク・ライフ・バランスの重要性が再確認されたといえる。



＜第三領域の活動パターンと生活の充実度＞

本研究では、超高齢化社会において焦点が当てられる自由時間領域を「第三領域」と呼んでいる。各種調査を参考に自由時間の過ごし方（活動や関心の対象を含む）を広範囲かつ網羅的に収集し、20歳代から50歳代までの回答者に平日や週末、長期休暇における自由時間の過ごし方を尋ね、主成分分析によってカテゴリ分類を行った。

分析の結果、以下に示すような30の活動類型が得られた。1. 外出せずにひとりで行う活動：「くつろぐ・ごろ寝」「インターネット」など。2. 女性的なイメージの趣味活動：「ガーデニング・園芸・庭いじり・盆栽」など。3. 世俗的な中年男性のイメージをもつ活動：「酒をたしなむ／楽しむ」「スポーツ観戦」など。4. 頭を使う・鍛える活動：「自己啓発」「資格取得」「教室・学習・研究」など。5. 男性的なイメージの趣味活動：「乗り物」「日曜大工・自分で何か作る」「釣り」など。6. 室内を中心としたゲーム活動：「ホー

ムゲーム・トランプ・パズル・クイズ」「ゲームセンター」など。7. スポーツ：「スキー・スケート・スノーボード」「サッカー・フットサル・ラグビー」など。8. あらかじめ予定を立てて出かけるような活動：「音楽会・コンサート・ライブ」「遊園地・テーマパーク」など。9. ショッピングと外食活動：「ショッピング」「外食」。10. 映画館などデートで行くような場所へのお出かけ活動：「映画館」「カラオケ」「デート」など。11. 健康を目的とするような運動：マラソン・ジョギング・ウォーキング」「トレーニング・体操・エアロビクス」など。12. 日常的に家で行われる活動：「掃除・家の手入れ・部屋の模様替え」「料理・お菓子づくり」など。13. 一般的に経済的、時間的に余裕のある若い女性が好むイメージの活動：「友人と過ごす」「おしゃべり・会話」「ウインドウショッピング」など。14. 他者と親密な関係を作ろうとする活動：「恋愛」「新たな知り合いをつくる」など。15. 自分や家族の心身の健康に関する活動：「からだの健康」「家族の健康」「こころの健康」など。16. 特定のスポーツやチーム、芸能人などにかかわる活動：「特定のスポーツ」「特定のプロスポーツチーム」など。17. 子育てにかかわる活動：「育児・子どもの世話・しつけ」「公園などで遊ぶ」「子どもの教育」など。18. 生き物の飼育にかかわる活動：「飼育」「生き物」。19. 音楽を演奏するなどの活動：「楽器の演奏・バンド・コーラス」「音楽制作」。20. 行楽や旅行など特別なお出かけ活動：「日帰り行楽」「ドライブ・バイクツーリング」「国内観光旅行」など。21. 政治・経済から科学、文化、歴史まであらゆる社会問題に関する活動：「食の問題」「経済問題」「環境問題」など。22. 身内とのつき合いや持病の治療など中高年の女性の活動としてイメージされるような活動：「親戚づきあい」「マッサージ・整体・鍼灸治療」など。23. 精神世界や不思議現象に関する活動：「占い」「精神世界」「超常現象・神秘思想」など。24. イベント、ボランティア、地域での活動：「近所づきあい」「町内会・自治会活動」など。25. 住まいや建物に対する関心や活動：「住まい（モデルハウス・リフォーム）」「建築、建造物、建物」。これ以外に、まとまりを形成せず単項目として残った活動は、「家の用事・かたづけ」「仕事」「テレビを見る」「労働組合活動（イベントへの参加なども含む）」「家族・ペットと過ごす」の5項目であった。

これら30の活動型について、組織に働く人々が実際にどのような第三領域活動を行って

いるのかについて検討を行った。各々の活動パターンを検討した結果、自由時間に「くつろぐ・ごろ寝」「ビデオ・DVD・動画鑑賞」「インターネット」など外出せずにひとりで行う活動をしている層が調査対象者の約15%を占めており、最も多いことがわかった。この層は日本の組織労働者の中では一般的な層であると考えられ、男性が比較的多いことが特徴であった。自由時間にこのような活動パターンを行っている層は仕事と家庭生活のバランスの満足度や生活全般の満足度が低い傾向にあった。こういった層が、今後、どのようなライフパタンの変遷を重ね、定年後にどのような暮らし方をするのか、今後、追跡・検討する必要があることが示された。

これに対して、仕事と家庭生活のバランスの満足度や幸福感が比較的高いのは、自由時間に行楽や旅行など特別な「おでかけ」を行っている活動性の高い層であり、生活全般の満足度が高いのは「家族・ペットと過ごす」、「育児にかかわる活動」を行っている層であった。また、幸福感が比較的高いのは「友人と過ごす」「おしゃべり・会話」など女性が好むイメージの活動を行っている層、「育児にかかわる活動」「家族・ペットと過ごす」などの活動を行っている層であり、これらには女性が比較的多いことが特徴であった。これらことから、男性に比して女性の幸福度が比較的高いこと、生きがいや幸福の源泉として家族や友人の存在が重要であることなどが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

山下京・八木隆一郎・川崎友嗣・依藤佳世・木下富雄、心理学を応用した公益研究事業の実践―産・労働・学の協働による社会運動としての研究―、日本心理学会、2011.9.17、日本大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

ライフパタン研究プロジェクト (ON・I・ON3)

<http://www.iewri.or.jp/cms/archives/share/onion3/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青野京 (AONO MIYAKO)
近畿大学・経営学部・准教授
研究者番号：20273568

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：